

論語古写本における漢字音について

石山 裕 慈

1 問題の所在

日本漢音は唐代長安方言を母胎としており、その体系はほぼ明らかにされている。また、日本呉音で見られるような、連濁や声調変化のような日本語化の度合いが少ないことも日本漢音の特徴である。しかし、中世の日本漢音にあっても、日本語の音韻変化に沿った変化が存したことを示す事実が多く指摘されて来た。すなわち、『蒙求』諸本にあつては、時代が下るにつれて頭子音のアヤワ三行の混同や四つ仮名の混同、合拗音の消滅や連母音の長音化などといった変化が生じているということが従来指摘されている〔注1〕。

その一方で、近年の研究により、同時代にあつても資料の性質や場面などにより日本漢音の姿が一樣ではなかったことも明らかにされてきた〔注2〕。日本漢音の研究に際しては、当該資料がどの時代のどの位相のものであるかを十分に吟味

し、様々な条件の下調査する必要があると言える。

本稿では、このような先行研究を踏まえ、博士家による漢籍訓点資料における漢音の性質を考察するという目的で、鎌倉時代〜南北朝時代初頭にかけて書写された『論語』古写本について、記入された字音注の傾向を探ることを試みる。論語はまとまった量の古写本が現存している上に、訓法の系統などについても明らかにされていることが多いのがその理由である。

2 使用資料の概観

本稿で考察の対象とするのは、以下の資料である。年代順に列挙する。

①高山寺清原本…巻七の後半と巻八を存する。鎌倉時代初期の書写と見られ、「如^{カク}形清家^{カク}」説^ト所読^ト也(巻七)「

という識語があるところから清原家の訓を伝えたものと考えられている。『高山寺古訓点資料第一』（東京大学出版会、一九八〇）によった。

②文永本：巻七（醍醐寺蔵）・巻八（東洋文庫蔵）が現存している。両巻に存する奥書から文永五（一二六八）年に書写されたことが知られ、中原師秀の訓説を伝えていることも分かる。調査は、小林芳規（一九七九）および石塚晴通・小助川貞次（一九八八）によった。

③嘉元本：巻四・巻八を存する。巻四の奥書により、書写年は嘉元元（一一三〇三）年で中原師有の訓説を伝えていることが読み取れる。前掲『高山寺古訓点資料第一』によった。

④建武本：巻二～一〇の全巻が現存しており、巻一～六は建武四（一一三七）年に清原頼元が、巻七～一〇は康永元（一一四二）年に清原良兼が書写したということが識語によって知られる。調査は複製本（蒲田政治郎発行、一九三七年）によった。

次に、これらの本の注音形式について見ると、それぞれの本には反切注・同音字注、声点、仮名〔注3〕が付されており、その量・比率は文献によりまちまちであるという特徴がある。次表の如くである。残存箇所が本によって異なるため、音注の絶対数は大きく異なっているが、嘉元本などは全体の

五分の一程度しか残存していない割に反切・同音字注の記入例が多く、逆に高山寺清原本では反切・同音字注が皆無であり、文永本などに比べ仮名の割合が高いなどという傾向が見て取れる。

	反切・同音字	声点	仮名
①	〇	一五四	三四五
②	四八	二六〇	一一九
③	一七八	五九〇	六〇八
④	七九八	二六八三	七四四

第1節で述べたとおり、近年の研究により日本漢音においても位相差が存したことが明らかにされてきている。その一端として指摘されているのは、同一人物（清原教隆）に関係する資料でありながら、『群書治要』の音注には反切・同音字注の割合が高く、一方『本朝文粹』は仮名・声点の割合が高いなど、注音形式に差が見られるということである。また、両者の違いは単なる外見上の違いにとどまらず、前者が後者に比べより規範的な音形が出現しているなど、字音注の規範性ともある程度連動しているとされている。

このような事情を踏まえると、反切注などの多い嘉元本に

おいてはより規範性の高い語形が出現し、逆に高山寺清原本では和化の進んだ語形が出現しやすいのではないかと想像されるであろうである。そこで、各本がどのような特徴を帯びているか、順に検討してゆく。

3 字音点の検討

3-1 ①高山寺清原本

まず高山寺清原本には、p入声が本来の「ㄅ」表記ではなく「ㄅウ」表記された例が多く出現する〔注4〕。また、これとは逆の、p入声字以外の字を「ㄅ」と表記した例も存する。

▽p入声字の例……………邑^ㄅ7-17〔注5〕、邑^ㄅ7-18、邑^ㄅ7-25、邑^ㄅ7-36、立^ㄅ7-36、邑^ㄅ7-38、接^ㄅ7-102、入^ㄅ7-120、法^ㄅ8-2、立^ㄅ8-58、柙^ㄅ8-89、柙^ㄅ8-89、甲^ㄅ8-90、邑^ㄅ8-91、十^ㄅ8-103、十^ㄅ8-104、妾^ㄅ8-144。
▽p入声字以外の「ㄅ」表記例……………有^ㄅ7-7、貢^ㄅ8-28、友^ㄅ8-30、遊^ㄅ8-114。

また、k入声字「篤」が「トツ」表記された例も二例（8・8・8-17）出現する。これは、いずれも「篤敬」という熟

語の一部であり、入声韻尾が促音化した例と見られる〔注6〕。このほか、本資料独自の現象としては、『高山寺古訓点資料第一』訓読文の「補註」でも言及されているような、臻撮合口歯音字の「ヒ」表記例の存在が挙げられる。出^ㄅ7-37・7-43・7-44・8-106、楯^ㄅ8-99、舜^ㄅ8-34、順^ㄅ8-24、潤^ㄅ7-12の各例であり、このような現象の背景として、沼本（一九九七）第一部第三章注（67）では、高山寺清原本の「口頭語的要素」の強さが想定されている。

とはいえ、このような類例を見ない表記の存在が、必ずしも漢字音の「非規範性」に直結するとは限らない面がある。すなわち、以下で述べるような伝統的な形を保っている用例も少なくないことから、あるいはこの「ヒ」表記も、「シキ」〔「スエ」〕などと一定しなかった臻撮合口舌歯音字表記の揺れの一つとも考えられる。

高山寺清原本の漢字音全般について見ると、鎌倉時代頃の日本漢音に見られる多くの変化がまだ生じていないという特徴がある。まず、鎌倉時代以降、m・n韻尾の混同が進んだとされるが〔注7〕、本資料では正確に「ム」「ン」で書き分けている。

▽m韻尾……………沈^ム8-115、禽^ム8-39、諧^ム7-94、参^ム8-18、深^ム8-69・8-122、陰^ム7-112、淫^ム8-35・8-36・8-115、任^ム7-61・8-15・8-86、枉^ム

…7 | 51・7 | 51、貪…8 | 92・8 | 121、儉…8 | 32、謙…8 | 144 など一九字二八例。

▽n韻尾……資…7 | 60・7 | 120、貧…8 | 63、陳…7 | 65、晋…7 | 38、紳…8 | 21・8 | 21、信…8 | 72・8 | 73、晨…7 | 103・7 | 103、隣…8 | 17・8 | 17、仁…8 | 26・8 | 28、奔…7 | 37・7 | 43・7 | 44・8 | 106、門…7 | 102 など五八字一〇例。

次に、古くは鍾（・腫・用）韻と蒸（・拯・証）韻は「i ヨウ」注8」、蕭（・篠・嘯）韻と宵（・小・笑）韻は「e ウ」と書き分けが行われていたが、この時期にはこの区別は消滅しつつあったとされる。しかし、本資料では正確に使い分けられているという特徴がある。

▽鍾（・腫・用）韻、蒸（・拯・証）韻……勇…7 | 24、從…7 | 43、用…8 | 30、矜…8 | 47、從…8 | 66、種…8 | 74、庸…8 | 81、庸…8 | 84、重…8 | 106、稱…8 | 110、称…8 | 141、称…8 | 142、称…8 | 144、称…8 | 144。

▽蕭（・篠・嘯）韻、宵（・小・笑）韻……要…7 | 38、召…7 | 45、召…7 | 54、廟…7 | 60、調…7 | 89、寮…7 | 94、寮…7 | 96、寮…7 | 97、韶…8 | 34、韶…8 | 34、了…8 | 69、蕭…8 | 100、蕭…8 | 100、少…8

— 103、驕…8 | 114、小…8 | 143。

また、鎌倉時代以降消滅したとされる合拗音の「クキ」 「クエ」も、以下の用例のようによく保たれており、合拗音が期待される所を「キ」 「ケ」と表記している例はない。

▽合拗音「クキ」「クエ」の例……揮…7 | 14、恵…7 | 15、譎「注9」…7 | 39、恵…7 | 90、黃…7 | 102、黃…7 | 106、越「注10」…8 | 32、危…8 | 36、慧…8 | 38、慧…8 | 42、龜…8 | 89、匱…8 | 90、血…8 | 119、血…8 | 120、曲…8 | 134。

高山寺清原本とほぼ同年代に書写されたと考えられ、論語と同じく漢文訓読資料である『大慈恩寺三蔵法師伝』鎌倉初期点では、上述のような混乱が生じ始めているとされる。その反面、字音直読資料である『蒙求』ではこのような変化は遅れたと考えられることが報告されている「注11」。以上のことから、論語が他の資料に比べ、日本語化の度合いが取り立てて早いといったような傾向は見られないと考えられる。なお、本資料では頭子音の「ヤ行・ワ行」の分布「注12」についても伝統的な日本漢音の傾向に沿っており、原則通りだと「キ」で表記されるべきものが「イ」になっている

などというような例は見られない。ア・ヤ・ワ行に関しては、以下で述べる四種類の論語各本においても混乱例が少ないため、本稿では特に言及しないこととする。

次に声調体系について見る。日本漢音は伝統的には六声体系であるが、入声の軽重は一二世紀中頃に、平声の軽重は一四世紀初頭までには混乱するようになり、四声体系に移行したとされる〔注13〕。本資料の場合、後掲の別表1に掲げたとおり軽重の混乱はあまり進んでおらず、同年代の法相宗の漢音資料〔注14〕に比べても正確であると言えそうである。

以上のことから、高山寺清原本論語における日本漢音は、p入声や臻撮合口齒音字の表記などに特徴が見られるものの、全般的には同年代の訓点資料に現れた日本漢音に比べても際違った日本語化は起こしていないということが指摘できる。

3-2 ②文永本

次に、高山寺清原本より約半世紀後の資料である、文永本について検討する。まず文永本では、後掲のように力行合拗音が保たれており、合口字が直音表記された例は原則として見られない〔注15〕。また、別表1に示したように、平声・入声の軽重も後の二本に比べ正確であるという特徴がある。しかし、撥音の表記に「ム」が使われておらず、「ン」に合流しているなど、m・nの区別ここでは消滅している。また、臻撮合口齒音字についても、合拗音を保った「楯」^{シキ}8

「134」が出現する一方で「順」^{シツ}8-20」という開拗音化例が出現しているほか、合口字の「瓊」に対して「瓊」^シ7-20」とした例も見える〔注16〕。iヨウ・eウの区別に関しても、後掲のようにそれぞれ一例ずつ混乱例が存し、またp入声についても、傍線を付したような例が見られる点が注意される。

▽合拗音「クキ」「クエ」の例……………危^{クキ}7-107、血^{クキ}7-115、揮^{クキ}7-126、譎^{クキ}7-155、糞^{クキ}7-232、糞^{クキ}7-237、闕^{クキ}7-256、慧^{クキ}8-44、闕^{クキ}8-62、均^{クキ}8-126。

▽鍾（・腫・用）韻、蒸（・拯・証）韻……………矜^{キョウ}52、種^{シュウ}8-93。

▽蕭（・篠・嘯）韻、宵（・小・笑）韻……………調^{テウ}7-215、寮^{シウ}7-221、了^{リョウ}8-84。

▽p入声字の例……………葉^{セツ}7-50、接^{セツ}7-232、柙^{セツ}8-117。

▽非p入声字の「くフ」表記例……………巧^{セツ}8-65。

文永本と、前述した高山寺清原本とでは、經典釈文によつた反切・同音字注の有無という点で外見上の相違が見られた。しかし、文永本の漢音は、高山寺清原本に比べて時代に応じた日本語化が進んでいることが窺えるのであり、反切などの引用が必ずしも字音点の高度な規範性と直結するもので

はなかつたことが分かる。むしろ、書写年代に応じた日本語化を蒙っているという点では、高山寺清原本と文永本の間に質的な差は存しえないと言えるのである。

なお、文永本における反切注に関しては、反切が仮名音形に影響を及ぼしていないことも指摘できる。すなわち、界カク(五報反) … 7—112、躁ソウ(草報反) … 8—162について見ると、反切下字「報」の影響を受けず〔注17〕、それぞれ「界」「躁」の漢音形として期待される「カウ」「サウ」と開音になっている〔注18〕。

3—3 ③ 嘉元本

次に、一四世紀に入って書写された嘉元本について検討する。本資料では、後掲するように、p入声字に「くフ」以外の音注を施した例やp入声字以外の「くフ」表記、iヨウ・eウの混乱例が見られる。このような現象は文永本の時点ですでに若干見えていたが、嘉元本にいたってその割合は増えているように感じられるところである。また、高山寺清原本・文永本では違例のなかつたカ行合拗音に関して、匱ケ … 8—101という直音化例が出現しているほか、瓊シユウ撰合口歯音字にも順 … 4—96、順シユン … 8—23の直音化例が現れる。撥音表記には「ム」「ン」の双方が出現しているとはいえ、必ずしも書き分けの確度が高いわけではないなどの特徴がある。

声調体系に関しては、平声・入声の軽重を区別している形

跡は認められるものの、文永本と比べると一層混乱が進んでいる(別表1)。六声体系から四声体系へと変化する過渡期の様相を呈していると考えられる。

▽ p入声字の例 …… 輒レツ … 4—23、輒レツ … 4—23、輒レツ … 4—24、執シツ … 4—32、執レツ … 4—33、葉セツ … 4—33、葉セツ … 4—34、葉セツ … 4—34、捷セツ … 4—92、撰セン … 4—102〔注19〕、桺リョウ … 8—100、甲ケツ … 8—102、十ジュウ … 8—118、入ジュウ … 8—134、妾セツ … 8—167。

▽ 非p入声字の「くフ」表記例 …… 丘ヒラ … 4—63、勇ユウ … 4—84、行コウ … 8—16、友ユウ … 8—30、教ケウ … 8—81、友ユウ … 8—129、驕キョウ … 8—133、遊ユウ … 8—134。

▽ 鍾(・腫・用)韻、蒸(・拯・証)韻 …… 憑ヒョウ … 4—15〔注20〕、雍ユウ … 4—81、興キョウ … 4—88、容ヨウ … 4—94、容ヨウ … 4—95、矜キョウ … 4—96、重ジュウ … 4—105、興キョウ … 4—107、稱ショウ … 4—126、從ジュウ … 8—47、從ジュウ … 8—71、種シュウ … 8—81、庸ユウ … 8—94、重ジュウ … 8—122、稱ショウ … 8—164。

▽ 蕭(・篠・嘯)韻、宵(・小・笑)韻 …… 韶セウ … 4—20〔注21〕、韶セウ … 4—21、趙テウ … 4—23、鈞ケウ … 4—49〔注22〕、鈞ケウ … 4—50、小セウ … 8—43、了リョウ … 8—74、了リョウ … 8—74、驕ケウ … 8—133。

▽ m韻尾 …… 「ん」表記になっているのは姑コ … 4—

23、厳…4—96、濫…8—7、俟…8—32、淫…8—34、感…8—34、禽…8—38、艷…8—82、任…8—96、貪…8—105、淫…8—135、謙…8—167。原則通り「くム」となっているのは七字八例。

▽n韻尾……………「くム」表記になっているのは問…4—15、典…4—33、乱…4—38、憤…4—89、順…4—96、乱…4—109、專…4—119、乱…4—119、紳…8—20、寔…8—134。原則通り「ン」となっているのは五一字八四例。

3—4 ④建武本

最後に、南北朝時代に書写された建武本について略述する。まず、合拗音が期待される箇所直音表記になっている例がある。順…1—18、狂…3—91、恭…4—120、愿…4—181、巍…4—184、帰…4—202、匱…5—66、惠…7—155の各例であり、嘉元本に比べてその割合が増えている。また、p入声字に「フ」以外の表記が行われた例、iヨウ・eウの混乱例、m・n韻尾の混乱例が多数出現するという特徴がある。建武本の書写年代を踏まえると、前述の三種類の論語各本と比べても目立った規範性の差は存しないと考えられるところである。

▽p入声字の例……………習…1—33、法…1—48、捨…2

—41、翁…2—98、給…3—17、捷…3—17、急…3—132、輒…4—40、執…4—54「注23」、葉…4—56、葉…4—57、答…4—58、捷…4—139、盍…6—184、接…7—268、接…9—139、法…9—158、接…10—6。

▽鍾（・腫・用）韻、蒸（・拯・証）韻……………誦…1—33、雍…2—6、頌…2—7、微…2—37、訟…3—111、憑…4—28、誦…4—56、恭…4—120、興…4—130、矜…4—144、升…5—10、仍…6—44、矜…9—65、矜…9—78、重…10—5、矜…10—57。

▽蕭（・篠・嘯）韻、宵（・小・笑）韻……………曉…2—163、驕…2—177、彫…3—17、彫…3—43、僑…3—65、趙…4—40、釣…4—79、召…4—194、天…4—195、笑…6—108、蕭…8—148、擾…9—23、趙…9—34、徹…9—117、篠…9—167、繚…9—193、揺…9—196、漂…10—58。

▽m韻尾……………「ン」表記になっているのは嚴…4—144、淫…4—201、飲…4—204、紺…5—155、缸…5—175、点…6—99、濫…7—19、嚴…10—26「注24」、陰…10—54、闇…10—54「注25」。原則通り「くム」となっているのは一五字一七例。

▽n韻尾……………「ム」表記になっているのは鮮…1—38、憚…1—66、温…1—140、盼…2—27、申…4—9、穿…4—83、婚…4—99、鐘…4—145、反…4—182、天…

5—25、^ハ 5—66、^ハ 6—108、^ハ 片…6—200、^ハ 論…7
—151、^ハ 7—167、^ハ 7—269。原則通り「^ハ」とな
っているのは五七字六三例。

本資料の声調体系について見ると、平声軽点・入声軽点の絶対数が少ないことが注意される。すなわち、筆者の調査によると、平声の八一三例に対し平声軽は二六例、入声の二一四例に対し、入声軽は五九例にすぎない。この中には字形の都合によって左下（右下）に差声することができず、結果的にやや上寄りに差声された「軽点」も少なくないと見られ、特に後半（巻七〜一〇）にその傾向が強く表れていると思われる。そのようなことから、本資料では軽重の区別は相当程度消滅していると考えられるのであり、仮名音注・声点ともに前項までで見てきた論語古写本の日本語化の延長線上にあるとすることができると言える。

4 論語各本の漢字音の背景について

前節までの検討で、高山寺清原本と建武本の一世紀半の間に、論語各本における漢字音の日本語化が進んだ様子を読み取ることができた。各本の間には反切引用の多寡や仮名音注の割合といったような外見的な違いは見られたものの、それらの要因が日本語化の度合いとは連動せず、それぞれの資料

がその時代に応じた日本語化を蒙っていた。そのため、博士家における論語各本では、漢字音に関しては本質的な差はないと言うことができる。そこで、次にこの背後にどのような事情が想定されるのか検討してみたい。

博士家における論語講読の場では、經典釈文が利用されていたことが従来指摘されており〔注26〕、論語古写本に記入された反切・同音字注についても基本的に經典釈文によっていとされる〔注27〕。また沼本（一九九七）第一部第三章注（67）では、嘉元本と高山寺清原本の漢字音に質的な相違が見られないことを指摘し、祖本の段階で存在した釈文引用注が高山寺清原本の段階で削除されたという事情が想定されている。詳細な事情まではもはや知り得ないとしても、反切・同音字注が記入されていない高山寺清原本にあっても何らかの形で經典釈文の影響を蒙っている可能性がある。

經典釈文などの中国側注釈書が漢文訓読に与えた影響については、松本光隆（二〇〇七）などで研究が行われているほか、注釈書の影響を受けたのは「訓読語」にとどまらず声点などの漢字音にも及んでいることが原卓志（一九八七）・小助川貞次（一九九〇）などで指摘されている。注釈書の痕跡とは、必ずしも反切・同音字注などの直接的な引用に限らないことが分かる。

以上のような事情を踏まえ、高山寺清原本について見ると、漢文読解上訓読されているにも関わらず、声点が記入されて

いる例が少なくないことに気づく。詳細は後掲の別表2の通りである。

このうち「○」を付した箇所は、經典釈文で反切が記入されている用例である。また当該字そのものは經典釈文で注釈が行われていない字であっても、「為」や「夫」などのように、他の箇所では注釈が施されている例が多いことが目を引く。これらについても、やはり經典釈文を念頭に置いていると考えられる例である。このようなことから、高山寺清原本で訓読される字に声点が施されている用例の多くは、經典釈文で注釈が行われている字に偏っているという事情が読み取れる。

このことから、高山寺清原本では反切・同音字注の記入がなく、外見上は經典釈文を参照していないようではあっても、実際には他の本と同様、經典釈文の影響を受けていたことが窺える。「博士家は陸氏の經典釈文によりて音義を審定し……」（足利（一九三二）一―ページ）、この（高山寺）清原本の祖本では他の清原本の場合と同様にやはり經典釈文を引用しつつ訓読学習が行われたのであって、それが中原本（嘉元本）と本質的差異がないという事象として現われ……（沼本（一九九七）第一部第三章注（67））などといった先行研究を追認・補強する結果になった。

論語各本の漢字音の伝承という面において、もう一つ注意されるのは、論語古写本の同音字注の中には經典釈文によら

ないと思しきものが存するということである。すなわち、論語古写本の中には、沼本（一九九七）第一部第三章第二節でも指摘されているような、「和風音注」と疑われる同音字注が存在する。すなわち、嘉元本に見られる「楯（8―113）」と「華（8―155）」については、前者には「食允反／音順（左側）」、後者には「如字又音化」という同音字注が加えられており、これは一見すると經典釈文の同音字注を引用したように思われるところである。しかし、經典釈文では、前者は「盾：又作楯並食允反」、後者は「華山：如字又戸化反」とあり、同音字注は存しないのみならず、広韻では「楯」が上声字であるのに対し、「順」は去声字になっているほか、「華」「化」についても前者は匣母字、後者は曉母字であるなど、中古音・唐代長安方言と対応していないという特徴がある〔注28〕。これらの直音注を中国語の観点から説明するのは困難であり、日本で発生したものであると考えるのが穏当である。

このような現象が生じた原因としては、前者については臻摂合口歯音字の音声的特殊性を重視してこのような類音字表記が行われたと想像できるところである。また、後者に関しては、「戸化反」の反切下字を同音字と誤認したという原因が想定できる。

ここで、文永本の同じ箇所を目を向けると、「楯（8―134）」「華（8―186）」にそれぞれ「音順」「如字又音化」と、嘉元本と同様の同音字注が出現しており、偶合とは考えがたい。

両者とも中原家の加點資料であるという共通項があり、中原家における伝承のあり方と関係するかと考えられる面もある

[注29]

博士家各家における訓詁法の固定については小林芳規(一九六七)で詳細に述べられているところであるが、字音注についても訓点と同様の伝承が存在し、その過程でその時々に応じた日本語化を蒙ったという可能性が考えられるところである。そのような可能性を想定すると、写本により漢字音の規範性に大差がなかったことも首肯されるのである。

5 結論

本稿の結論を簡条書きにすると以下の通りである。

①今回調査した論語古写本四種類は、反切・直音注、声点、仮名音注の割合がまちまちである。

②前条の音注の多寡は、軽声の保存・「ム」「ン」の区別などといったような、字音注の規範性とは連動していない。すなわち、どの本もその書写年代に応じた日本語化を蒙っており、その点では論語各本の漢字音に本質的な差はないと言える。

③このような傾向が生じる原因には、經典釈文の存在が背後にあったものと考えられる。外見上經典釈文の注を

全く引用していない高山寺清原本にあっても、經典釈文を利用した痕跡が認められる。

本稿では、第4節で指摘したような和風音注のあり方などについて、踏み込んだ考察は行えなかった。また、論語では反切に影響されない仮名音注の加點も見られたことから、反切引用の目的などにも疑問が残った。その他、今回取り上げることができなかった問題は多岐に亘るが、今後の課題としたい。

〔付記〕

本稿は、東京大学で開催された「東京大学・高麗大学共催 日本語学・日本文学・中国文学 国際シンポジウム(平成二〇年二月)」での発表内容を改稿したものである。席上、月本雅幸先生・肥爪周二先生には有意義な御指摘・御指導を賜った。記して深謝申し上げる。なお、本稿は平成一八年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

〔注〕

1 沼本克明(二九八二)第二部第二章第一節、佐々木勇(一九八九)など参照。

2 佐々木勇(二〇〇四、二〇〇五)など。

3 本によつては後筆の仮名が加えられている場合も存するのだが、本稿ではこのような例は考察対象から省く。

4 これはハ行転呼音を反映した現象であり、平安時代末〜院政期初頭から文献に現れるとされる。沼本克明（一九八六）など参照。

5 用例の引用に当たつては、所在は「巻」——「当該写本における行数」で表し、声点は省略する。また、論語各本では同音字注の表記に「六」「七」などに近い表記が用いられているが、全て「音」字に置き換える。

6 同じ箇所が嘉元本でも「トツ」表記になっており、k入声の促音化は一般的な現象だったことが分かる。類例に関しては、沼本（一九九七）第五部第二章第一節に詳しい。

7 沼本（一九八六）などによる。以下の記述についても同様。

8 以下、iでイ段音全般を、eでエ段音全般を表す。「注17」のa・oも同様。

9 「クエイ」の仮名も付されている。

10 經典釈文では「戸括反」となっており、「クエツ」の仮名は不審。文永本・建武本の同じ箇所では、この反切とともに「クワツ」の仮名が付されている（ただし建武本の反切は「戸枯反」となっている）。

11 佐々木勇（二〇〇三）による。

12 日本漢音において、影母と喩母がア・ヤ・ワ行のいずれを取るかは、等位と開合によるとする説が提出されている。沼本（一九八二）
第二部第三章第四節参照。

13 柏谷嘉弘（一九六五）など。漢籍を資料とした軽声の消滅につい

ての研究には、佐々木勇（一九九八）がある。

14 佐々木勇（一九九五）による。

15 合口字の「猜」が、猜^ク…7-71と表記されている例が存するが、「猜」は韻鏡四等字であることから、当初から「ケン」で写されたものと考えられる。有坂秀世（一九五七）第二部ほか参照。

16 同じ文永本に「環^ク…7-197」という例もあり、揺れが認められる。

17 「報」が所属している豪・皓・号韻の日本漢音形は原則として「aウ」だが、ハ行音のような唇音を頭子音に持つ字に限つては、子音の影響を受けた「oウ」で写されていたことが有坂秀世（一九五七）第一部で指摘されている。「報」の漢音形も伝統的に「ホウ」であり、反切に従うと「界」「躁」には「コウ」「ソウ」が期待されるところである。

18 日本漢音資料には反切・同音字注から作り出された「人為的漢音形」が存する場合があるが、文永本論語に関してはそのような例が見られないことになる。人為的漢音形については、沼本（一九八二）第二章第一節第二節、佐々木勇（二〇〇二）など参照。なおこの種の人為的漢音は、今回調査した四種類の論語古写本のいずれにも出現しない。

19 この例はサ変動詞「撰ス」に対する字音注であり、入声韻尾が促音化した例と見られる。このようにp入声字に無声子音が後続し、促音化したことが、p入声字の「ツ」表記につながつたとされる。小松英雄（一九五六）参照。

20 「憑」などの蒸・職韻字の表記については、声母や開合といった

中国語側の条件も関わっていることが平山久雄(一九六七)により指摘されているため、単純に iヨウ・eウの混乱例として処理することができない面もある。なお後掲するところであるが、建武本では同じ箇所が「ヒヨウ」になっている。

21 仮名音注とともに「時昭反」の反切注が記入されている。同じ「韶」字でも次の「韶」は「シヨウ」となっていることから、反切注の影響により規範的な語形が出現したとも考えられるところである。

22 「チヨ」の仮名も記入されている。

23 「執礼」という熟語の一部であり、促音化する環境にないことから「執」を「シツ」と把握していた例と見られる。前述小松(一九五六)参照。

24 「ン」の箇所に虫食いがある。

25 仮名は少し前の「陰」に傍書されたものだが、「闇」に対する音注を誤って付したものと判断した。

26 足利衍述(一九三二)による。その一方で、鎌倉時代の博士家論語加點資料には、經典釈文だけでなく朱子の新注の影響も見られるということが近年指摘されるようになった(呉美寧(二〇〇六)第一部第二章)。しかしこの時代においては新注の影響は限定的であり、本稿の論旨に影響を及ぼすものではない。

27 新美保秀(一九五七)、沼本克明(一九九七)第一部第三章第二節など。

28 博士家で利用された經典釈文は、現存する通志堂本などの宋版本とは系統が異なっていると考えられ、それが両者の反切注などの齟齬

の原因であるということが新美(一九五七)、沼本(一九九七)第一部第三章第二節などで指摘されている。しかし、この場合に関しては、そのような原因を想定するのは困難であると思われる。

29 高山寺清原本と建武本には、この音注は見られない。他の論語古写本の分析が欠かせないところである。

[参考文献]

足利衍述(一九三二)『鎌倉室町時代之儒教』(日本古典全集刊行会)有坂秀世(一九五七)『国語音韻史の研究・増補新版』(三省堂)

石塚晴通・小助川貞次(一九八八)『文永本論語集解卷第八』(訓点

語と訓点資料』八一)

呉美寧(二〇〇六)『日本論語訓読史研究』上・下(丁&C)

柏谷嘉弘(一九六五)『図書寮本文鏡秘府論の字音声点』(『国語学』

六一)

小助川貞次(一九九〇)『上野本漢書楊雄伝の声点について』(『国語

国文研究』八六)

小林芳規(一九六七)『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』(東京大学出版会)

——(一九七九)『醍醐寺藏論語卷第七文永五年点訓読文』(醍醐寺文化財研究所『研究紀要』二)

小松英雄(一九五六)『日本字音における唇内入声韻尾の促音化と舌

内入声音への合流過程——中世博士家訓点資料からの跡付け——』

(『国語学』二五)

佐々木勇 (一九八九) 『蒙求』字音点に見られる日本漢音の変遷——鎌倉時代を中心として——『国文学攷』二二二)

—— (一九九五) 『十一〜十三世紀における法相宗の漢音』(鎌倉時代語研究) 一八)

—— (一九九八) 『日本漢音における軽声の消滅について——漢籍を資料として——』(鎌倉時代語研究) 二二)

—— (二〇〇二) 『日本漢音における反切・同音字注の仮名音注・声点への反映について——金沢文庫本『群書治要』鎌倉中期点の場合——』(国語学) 五三—三)

—— (二〇〇三) 『大慈恩寺三藏法師伝』鎌倉初期点における漢音形の日本語化——院政期点および『蒙求』字音点との比較を通して見る——『新大國語』二九)

—— (二〇〇四) 『金沢文庫本『群書治要』と久遠寺蔵『本朝文粹』との漢字音の比較——鎌倉時代中期における漢籍と和化漢文との字音注の差異について——』(音声研究) 八一—二)

—— (二〇〇五) 『久遠寺蔵『本朝文粹』鎌倉中期点の漢音声調——金沢文庫本『群書治要』鎌倉中期点との比較を通して——』(訓点語と訓点資料) 一一—四)

新美保秀 (一九五七) 『我国古伝論語古写本に書入れられた論語釈文の性格と価値』(日本中国学会報) 九)

沼本克明 (一九八二) 『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(武蔵野書院)

—— (一九八六) 『日本漢字音の歴史』(東京堂出版)

—— (一九九七) 『日本漢字音の歴史的研究——体系と表記をめぐって——』(汲古書院)

原 卓志 (一九八七) 『古文尚書平安中期点における朱声点・点発について』(広島大学文学部紀要) 四六)

平山久雄 (一九六七) 『中古漢語の音韻』(『中国文化叢書』1・言語) 大修館書店)

松本光隆 (二〇〇七) 『平安鎌倉時代漢文訓読語史料論』(汲古書院)

(いしやま ゆうじ) 大学院人文社会系研究科 博士課程四年・日本学術振興会特別研究員(DC)

別表1

①高山寺清原本

	平声・入声			
	全清	次清	全濁	清濁
平声	19	2	37	36
	15	2	27	22
平声軽	27	3		1
	24	3		1
入声	2	1	7	3
	2	1	5	3
入声軽	3		1	2
	3		1	2

②文永本

	平声・入声			
	全清	次清	全濁	清濁
平声	21	1	36	32
	21	1	29	22
平声軽	20	7	1	
	18	5	1	
入声	5	4	11	4
	4	3	10	4
入声軽	19	6	6	5
	15	4	4	4

③嘉元本

	平声・入声			
	全清	次清	全濁	清濁
平声	40	12	42	69
	33	9	26	30
平声軽	29	9	6	
	25	8	5	
入声	14	3	9	7
	11	3	7	5
入声軽	19	1	9	7
	17	1	7	5

※上段がのべ字数で下段が異なり字数。

別表2

字	卷	所在	声点	よみ
射	7	2	平輕	ユミ
為	7	3	去	タメ
誨	7	10	去	ヲシハ
復	7	13	去	マタ
更	7	14	平	ヘテ
鮮	7	14	上	スクナシ
飯	7	17	去	クラフテ
易	7	20	去	ヤスシ
厭	7	32	去	イトハ
為	7	37	去	タメニ
譜	7	37	去	シヨチヲ
与	7	47	平	ヤ
被	7	51	去	カウフリ
過	7	55	平輕	スキ
夫	7	59	平	ソレ
喪	7	59	去	ホトヒ
夫	7	65	平	カノ
夫	7	67	平	カノ
復	7	68	去	マタ
復	7	69	去	マタ
為	7	72	去	タメ
為	7	73	去	タメ
使	7	76	去	ツカヒノ
使	7	76	去	ツカヒ
夫	7	82	平	ソレ
惑	7	95	去	マトヘル
陳	7	97	去	ノフルヲ
解	7	110	上	サトルコト
好	7	114	去	コノム
易	7	114	去	ヤスシ
叩	7	119	去	ウツ
見	8	13	去	マユ
倚	8	20	平輕	ヨルカ
工	8	29	平輕	タクミ
遠	8	36	去	サク
借	8	56	去	カン
借	8	56	去	カン
惡	8	57	去	ニクミ
仰	8	70	平	アフリ

字	卷	所在	声点	よみ
復	8	72	去	マタ
為	8	74	去	タメ
見	8	75	去	マユ
相	8	78	去	ミチビク
見	8	80	去	マミエテ
相	8	82	去	タスケテ
夫	8	83	平	ソレ
相	8	88	去	タスクル
夫	8	92	平	カレヲ
舍	8	92	上	ステテ
夫	8	96	平	ソレ
為	8	105	去	タメ
知	8	115	平輕	シラ
隱	8	117	入	カクシ
思	8	126	去	ヲモヒ
与	8	135	平	カ